

郎路生麻・幹主

川柳雜誌

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
大正十五年十一月一日發行每月一回一日發行

川柳雜誌 第三卷拾二月號

川柳雜誌社發行



川柳献句祭

管公千二十五年祭を紀念するため、
川柳献句祭を行ふ。

時 日 大正十六年一月十六日
午後一時より

會 場 大阪市北區天満(市電南
森町下車) 天満宮に於て

兼 題 「梅」三句 麻生 路郎選
會 費 五拾錢(當日持參の事)

其他講義、紀念撮影、景品贈呈等につ
いては「川柳雜誌」新年號を御覽下さい
作句に經驗のない方の御出席をも歡迎
いたします。

主 催 川柳雜誌社
後 援 天満宮社報社

柳談會に就て

從來第二日曜に遅日莊で開かれた柳
談會は十二月、一月を歳末、年始多
忙のため休會ございました。初柳談
會は二月の第二土曜の夕刻から開催
いたします。
尙大正十六年度から柳談會は一月八月
十二月を定期休會とすることに編輯會
で決めましたから、そのおつもりで御
出席願ひます。二月の初柳談會は何か
新しい味のある話をしたり、開いたりし
たいと思つてゐます。十一月の柳談會
の記事は新年號で發表することに
なりましたから御出席の方は御諒願ひま
す。(幹事)

川柳雜誌 第參卷第拾貳號目次

感想・評論

傀儡子に就て語る 木村半文錢

病中贅言 蛭子省二

眞實と技巧 林田馬行

研究・其他

俳風柳の誤謬に就て 西原柳雨

樽全集 森 東 魚

追 憶 安川久流美

霜月つかぬ心 岩崎 柳 路

或るビルの上にて 竹馬居主人

柳雨翁の誤謬に就て 花岡 百 樹

俳風柳の誤謬に就てより 酒井 駒 人

樽全集 大島 千 人

新戎橋より 萬 生

▲募 集 句 篠原春雨選

老 人 金 持 刀三・松雨共選

本社十一月例会 二 柳 子 記

鳥取の莊同人吟行 S 生

各地柳壇 松 耶 編

川柳家の戸籍調べ・編輯後記

創作

川 柳 塔 塚崎松郎

酒井駒人

横田眠聲

岩崎柳路

三好革郎

檜山千代二

林田馬行

井上刀三

高橋かほる

黒木莢豆

麻生葎乃

橋本二柳子

粒々集 蛭子省二

同 柴谷柴舟

近作柳樽 諸 家



傀儡子に就て語る

木村半文 錢

大阪に住みながら、御靈文樂座へ大分久しく御無沙汰をしてゐる。だが以前は可なりアの空氣に淫した時代もあった。それは兎まれ、あの特異の空氣の中にも、一種ズバぬけて特異な世界を持つのは、何んさいふても人形遣ひであらうと思ふ。太夫も三味線も個々に就ては特異な世界をもつてゐるやうが、人形遣ひはさの不可思議な世界は無いやうだ。それが人間の名優が何うしても演出のできない不思議の魂を見せる點にもあらうが、私はそれ以上に、人形を生かして自分を殺してゐる舞臺生活に何にも興趣を抱く。縱令、美しい上下姿で出遣ひしても、人形をのみ淫き出させて、人形遣ひそのものは魔山のやうに隠れて見へないことだ。

だが、ぢいッ其の時に瞳をこらして見るに、人形と共に喜怒哀樂を分けてゐる人形遣ひが人形を勢はりながらバックにくつきり存在する。そして亦しても、私の眼から彼は消散して了ふ。實に不可思議な現象だといつも思つた。が、一度その額の深い皺を見つけてから、これだ——確かに彼の隠見出没する不可思議の現象は、此の額に深い皺を刻みつけた藝術の賜物だ。知る事を得た。それ程に人形遣ひの皺は特異の線。深い陰を有してゐた。

人形を、吾子以上に溺愛する人形遣ひの心理も、生活さうな方程式からは當然愛さなければならぬ必然さに置かれやうが彼等の人形を愛するこゝろは現代人の唯物思想では摩訶不思議の存在だ。私は人形遣ひの額の皺をみつけた日にいやに暗い心を抱いて歸つたが、それ以來は行く度に此額の皺が脅威となつた。そして人形遣ひの全部が何うしても特異の世界に見へてゐた。だが——その特異の世界にも久しい間足向けをせぬ私は、不思議にも近頃、この人形遣ひの祖先——民族的祖先に當るのが、彼の日本開國以前に放浪してゐた傀儡子であることを知つた。

そして如何にも彼等少數の民族が、數奇な生活を送りながら、二千六七百年の今日まで、其の生活を押し通して來たさいふ驚異である。史實の傳へるころでは、傀儡子は、その頃、即ち紀元前には、極く少數ではあるが、放浪生活を營んでゐた。今日でいふテント生活をしながら、彼等は次から次へミ土地を移動した。そして他の民族に自分達の技藝を教へるか、但しは觀覽せしめて、生活の糧を得てゐた。尤も、現在露西亞の一部でもオーロラの下で同じ生活を送る民族があるが、あつたものを二千數百年前の吾國に所有したことは、時間的にも、人種的にも、地理的にも、興味のある問題である。と共に人間の生活のウラが我々に深刻に教へるアルものが窺ひではないか。

傀儡子放浪生活は、主として五畿内(と言つても其の頃に區分はないが)方面に限られてゐたらしい。その頃の五畿内には、今、北海道で熊と共に生命を保つてゐるアイヌ族、そのアイヌ族を次第に東北へ壓迫した彌生族、この二民族が勢力を有してゐた。出雲民族も山陰一帶を占め、美作越へ山陽へ出て勢力を伸してゐた。それらの民族の緩衝地帯は、主として攝津の海岸地であつたらしい。兵庫の大輪田泊や神戸にある夢野なとも其の頃は形式だけでも存在してゐたやうだ。それは考古學に譲つて於て、この優勢なる民族に介在して、尙ほ少數の民族が生きやうとした努力——それを私は言ひたいのだ。

傀儡子は、元來技藝を専門にした民族でもあるまいと思ふ。私の憶測を許すなれば、彼等も他の優勢なる民族の壓迫に對して、武力を執つて對う時は、恐らく天孫民族の天降以前に、全滅したのであらうと思ふ。だから已むを得ず音曲に藉口して、

彼等の歡心を買ひ、生きるために媚を捧げたのではないか——二千數百年前の未開地にも、斯うした民族的爭鬭の哀話がある。現在にも此のやうな哀話は地球の隅々に轉がつてゐる。私は斯う獨斷を恣にしてゐるのだ。

だが此の傀儡子は、その頃の大民族(比較上)たるアイヌや彌生族が既に亡び、亡びつゝあるに比べて、不思議にも日本の各地へ特有の藝術を貽して來たことだ。それは天孫民族が愈々五畿内を根據地として、茲に豐葦原瑞穗國を築き上げて以來、彼等は巧に此の新參民族に喰ひ入つて、そして彼等の生活を打ち立てて來た。其の間にはアイヌは完全に東北へ驅逐され、彌生族は或は仆れ、或は降参して混血の遺民をのこして、地上から去つて了つた。而も、そのアイヌにしろ、彌生にしろ、極めて強靱の民族であつたさいふから、恐らく妥協の策を講ぜず、飽くまで戰つたものであらう。

アイヌの如きは現在では、世界の民族中でも極小民族に位してゐるが、その頃の勢力はたいしたもので、後に天孫民族に降伏してからも他の強豪の敵には先陣を承つて必ず勝利を得たさいふから、その聲援さも想像されやう。それが今日では何うだ。熊を相手に海面の鬣の中から、鋭い眼を細めて喜悅してゐる其の生活を何と見やう。政府の保護の下に——尙ほ年々歳々に衰亡して行く彼等の生活は既に神武以來のアルゴール中毒でもあらう、だが一面、彼等は未だ自分の強豪である誇りを以て、祖先以來の生活を踏襲してゐるやうだ。己れは強い、己れは強い——と自負しながら、亡び行かんとするアイヌの一面にも民族的哀話がつむ。

彌生族は、恐らく現在の大和方面の山間に潛伏して、巧に今

日まで混血ながら其の遺族を止めてるやう、ご共に妥協したのは勿論、派に生活を許されたであらう。昨年だったか大和の某方面で發掘した彌生土器にはたしかに稻の穂が盛られてあると報告したが、未だ結果は私には分らない。だが、大正の今日でも、華燭の典に無くてはならぬ三々九度の土器は、彼等民族の遺風を傳統したものである、神に供へる五穀の土器も、清水の土器も同じ遺風だ。併し史上では彌生一族を見出して、地上ではもう其の實在を失ふそこにも民族的哀話が窺ひではないか。ところが不思議にも傀儡子は、その特有の生活をして今日まで生きて來たのだ。彼の北國の雪空を衝いて、はる／＼小さい肉體を地方に運んで、そこにトンボをきつて糊口とした越後獅子（角兵衛獅子）は、正に傀儡子の地方的分布になる子孫ではないか、彼の正月や春の休みを目にかけて出て來る春駒や大神樂も彼等の正しく子孫であるのだ。天王寺で彼岸になると、蛸や鯛のハリボテ人形を見せて、小供や大供に三錢の泣き別れを演じる大道藝人も、まさしく傀儡子の子孫であるのだ。それに地方へ行くとき、大道で人形を遣ふて見せる藝人があるか、アレも傀儡子の子孫としては輝々たるものだ。彼等は皆、祖先がその大昔に營んだ生活を、今日にまで傳統して、そこに民族的特有のカラーを植へつけたのだ。文樂の人形遣ひも正に此の民族の子孫である筈だ。アノ深い一種異様の額の皺は、小數民族の生きんじした努力の表徴だ。そこに微妙なアルものが看取されるのは、あなたがち私人の獨語的嘆嘆ではない。

さういふ意味で諸君は、アノ天王寺のオツサンを見るさい、そこには現代人の到底刻むことのできない額の皺を發見されやう。亦文樂の明滅するてすり、彼等の藝道以外の苦惱の皺を見出した時、彼等は二千數百年來も此の生活を傳統した民族であることを心算に考へてみるがよい、角兵衛獅子も春駒も都會にはダン／＼見るこゝが出来なくなつたが、大神樂の一面はしば／＼大道に民衆に今でも訪れて來やう。たゞ彼等に懷古的意識を表するより、彼等の祖先の職業的生活そのまゝを傳統した、その民族的自立意義を味はへば足りやう。

西の宮夷神社の末社にある百太夫は、彼等民族の祖先を祭祀したのである。然し此の百太夫は個人稱でなく彼等の祖先の復數であるさうだ。何ういふ意味で夷神の末社に加はつたのか知る由もないが、此の百太夫は、後年夷神社が石清水八幡體された時にもお供をして末社に加はつてゐる。亦、その後天滿の天神様にもお供をしてゐるが、この百太夫が白太夫となつて、菅公の忠臣に仕組まれてゐるなき、そこには興味津々たる變遷がある。それを述べてゐる秋の夜の長さも抑たねばならぬ程の材料がある。私はそれより、此の結末に何を述べやうとするのか、それは少數なる民族も、生きんじする努力には、必ず後代に於て其の酬ひはある、よし、それが藝術には無價値である多くの遺産にしても、そこには能く生き得た努力の賜物は光つてゐるやう。それは何んであらう？ 現在の川柳界に捧けて置く。そして私は再び、アノ深刻な人形遣ひの額の皺をこゝろから凝視めてゐるやう。それが良い、それが良い――。



病中贅言 (上)

川柳參尾志を讀みつつ

蛭子省二

古句研究上多大の指導と興味を與へて下さる柳雨翁の最近著、それは畏友桂雨氏の御翰旋多きものがあるので、心待ちする月あり、發行所から直送された時は非常な歡喜であつた。病櫛に在る身は巻を開くも十枚にして續かない。翁には御出版の祝辭を呈し病者の心細さを訴へた。翁からお便りがあり再度の端書に是非批判せよと申越された。

敬親なる翁の著を評する資格はない。雷讀めば教へられる、教わらるれば感想が湧く、此感想を無遠慮に述べさせて頂く事が同じ川柳道に在る者としての責任とも思ひ、且つ自分は名古屋生れなので幼少時の追憶に耽りつつ贅註贅解を記して翁にお目に掛けた、そして活字にする丈けの御諒承は得られたのである。

(附記) 句の上に○印あるは同書に掲載されしもの、各項の始めに頁を記すは同書と對照の便のため。

▲一四九頁。著者よりの訂正「金は金吾中納言即ち浮田秀家のこゝである」は、小早川秀秋の誤り。

▲一六三頁。著者よりの訂正「片桐は茶々即ち淀殿の爲に滅茶苦茶なり」

○片桐が爲には茶々の局なり(化)

は誤りにて、茶々の局は家康方の阿茶の局に對するもの、彼の鐘問題以來の葛藤

なり。

▲二頁。尾張名物を集句にした趣向とし

て

○鹹餅と大根で名古屋味噌を(政)

は索引に「名古屋味噌」の項が置かれてあるから、鹹餅、尾張大根及名古屋味噌を三名物と解されたわけ(此句二葉柳にあり大正川柳誌上翁の解も同様なり)恐らく名古屋味噌は昔時には名物なごではなかつたと思ふ。近時市場で便宜ナゴヤ味噌の稱呼を用ひ出したので、これは古句の手前味噌の意に過ぎない。參尾に於ては岡崎八丁味噌が著名である。

▲三頁。○木曾山の檜は松のおすそ分(政)の古柳句に對し、惟然の作に

蚊柱に名古屋の町や檜な匂ひ

▲九頁。十一月月上旬上野帝國圖書館では錦繪の江戸時代東海道旅行展観が催された由序なれば五十三次に就て贅言します

○富士をいけきつてお庭へ五十三(寛)

雲井迄上るはこしは五十三

(註) 雲井とは京都までの意

前には六十三次あつたのを徳川氏が江戸に幕府を開くや、本海道五十三次を定め

た、夫れは振出しの日本橋さ上りの京を
除いた驛数で

紫へくる道中も五十三

宮桑名間を陸行するに五十七驛なる、

道程は百二十四里八丁

雲の上までは梗が百二十

此の五十三次が佛教思想から胚胎した事
は一寸知らぬ方がある。佐々木月照氏の
著に簡単に記されてあるから抜記する。

何故に善財童子が五十三人の善智識を
尋ねたかといふに佛教の最後の涅槃の
都に到達するには五十三の階段を通過
しなければならぬからである。即ち最

後の都に入る宗教の旅人は常に五十三
次の驛がある、わが善財童子は五十三
次の驛を通過して京都の伊盧遮那佛の
都に入つたのである『京都』は正し

くこの華嚴經から出た語であると思ふ
此頃お札博士のスタールさんが東海道
五十三次を旅行せられたが此の五十三

次も亦華嚴經から出たのである。廣重
の繪をみるに東海道の驛場の繪で私の
三河の吉田は婦人が二階から覗いてる

るところがかいてある。所謂善財童子
の尋ねた東海道の装束密女である。色
々の誘惑や胡麻蠅につかれた昔の東海

道は華嚴經に現はれた道程によく類似
してゐるやうである。かく考へるに奈

良平安の装束の都大路小路またそれへ
の通路の作り方は華嚴經を初めして
我佛教の意味をこつた様に思はれる。

比叡山に登るに初めて近江の湖水の見
ゆる所がある。之を歡喜地といひ何れ
も華嚴經に示されたものである。

▲一四頁。楊貴妃が熱田神宮祭神の化身
なりこの事。

○楊貴妃はと神州のまはしもの(安)
著者は名古屋市史でお知りになつたさ
る。自分は左の二ツの材料から知り得た

もろこのしの方宗皇帝は四百餘州をおさ
め此日本をもごらんくはだて給ふこ
ころに明神は楊貴妃となりて世をみだ

し給ひければ日本を取る事かなはず
：やうきひの魂いづくにあると尋ね
られしに、蓬萊山におはしますとてた

づねきたりしは、此社也と申つたへた

り。(東海道名所記)

楊貴妃を玄宗の后といふは知らぬ者
のいふ事よ、さうべつやうきひは熱田
から出られたといふがまことなり。

(醒睡笑)

こある。謠曲楊貴妃に「蓬が島つ鳥」が
熱田を仄かしたこのお説は御卓見で「養
老」には「實にや尋ねても蓬が島の遠き

世に今のためしも生薬水また水はよも盡
きじ」こあるは、唐土神仙の住む島、海
在三神仙、曰蓬萊方丈瀛州其山桐去各埋

狀似壺矣である。王生二品の歌「君が爲
め蓬が島もよりぬべし、生薬さる住吉の
浦」蓬が島も龍宮同様、探險隊を組織せ

ねばならぬ。

▲一九頁。徐福の句が載せてある。

○仰山に連れ立ち秦の山師來る(保)

『華夷變態』にこんな滑稽な馬鹿けた書
簡の和譯が記されてゐる。

書を日本國の賢王藩下に致す、竊に惟
るに我大明疆宇をひらき、南点北点を
建並べ十三省を定め天下悉く遠はす

こ云ふ事なし、異國の内にては日本獨

り徐福が子孫として大明に留遠し、雖もこれ唐人の子孫なり。

▲二八頁。景清は奸僧にせよ伯父の大日坊を殺したから惡七兵衛と自稱したとし

て

○義理人義知つた男は七兵衛（實）が掲げてゐる。此句は頼朝の寛大な處置恩顧に對し咏じたものだとの別説もあるが、自分は前二説を併せた句意だと思考してゐた。然らざれば義理人義を重ねなくてよさそうである『景清は義身のやうな義理を立て』で義理は對頼朝とし、人義は人の踏む道の謂で大日坊關係で

あらう。

▲三八頁。信長が熱田神宮に祈つたナメカタの一葉。

○なめかたで織田程勝つたものは（天）今でもナメカタ判斷は或る種の女はよくやる、古句にも『なめかたで見るとは夜鷹の磨算』がある。秀吉も征韓に際して嚴島神社に勝利を祈願し、此の錢悉く表面を現はすべしと千枚を投げたら、表面をむいたので戰士は勇むで出發したさある。實際に兩人とも試みたのが川柳では織田許りになつてゐる。こは秋青錢卜の模倣で女同放言にも記載されてある。

源氏知囊全集、曰、南俗尙鬼、狄武裏征儂智高時、大岳出桂林之南、因祝曰勝負無以爲據、乃百變自持之、與神約果大捷、則投此筮盡面、左右謀止、倘不如意、恐阻師、武裏不聽、萬衆皆視已而揮手倏一擲、百筮皆面、於是舉兵觀呼、聲震林野、武裏亦大喜、顧左右取百釘、即隨筮疎密、布地而帖釘之、加以青紗籠、手自封焉、曰、俟凱旋、當謝神取筮、其後平山州還師、如言取筮、幕府士大夫其視、乃兩面筮也。昔の軍人は無邪氣なものだ、桶狭間の句にはこんなものもある。

べたは桶皮毀したは桶狭間（狂）底ぬけてがらり崩るる桶狭間（狂）（未完）

粒々集

かた足

蛭子竹馬

雑

詠

柴谷柴舟

障子紙裁ちそこねてバンを食べる
がちやがちやの片足捨て二階借
糸瓜棚に腰かゞめ月掛けの世話
女下駄に馴れ朝を出る病上り
はね釣瓶に犬が吠へ妻の看經
茶がす捨てに留守居は鼻緒をゆるめ
廻轉椅子に朝まだき名附親さなり
死むだ犬の鑑札がさびし釘箱

電燈はまだかミ爪を切つて居り
雪をかく様にかみそり動くなり
オヤツ切りやがつたナミ思ひつゝ
なるほごゝ思へごまねが出来ぬなり
あいてもないのに戀の指導をうけて居り

麻生路郎選

冷笑

同同同同同同同神同同同廣同同同丸同同同島同同同鎌
戸島龜根倉
三志郎露斗柚園坊櫻ン坊洋燈子
ひで二素生

同 同 同 大 同 同 同 同 營 同 同 高 同 同 同 同 同 同 大 同 同 同
阪 池 知 阪
彩 同 同 椿 同 同 讚 同 同 澁 同 同 濁 同 同 同 光 同 同 同 史 同 同 同
秋 薰 柳 面 子 水 路 朗

大	兵	山	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	神	同	德	同	岡	同	北	同	同
阪	庫	口											戸		島		山		海		
青	芳	千	同	清	同	天	同	嶺	同	柳	同	よ	同	志	同	倒	同	龜	同	吟	同
亭	香	鳥	公	子	塊	月			造		久	郎		壘		珍		柳			

本社十一月例會

六日午後七時
於 端 的 坊

本社十一月例會を六日午後七時より端の坊に於て催す。神戸より相元紋太、土見秋晴兩氏の來席あり。主幹路郎氏は東上中の爲め兼題は松郎氏之を代選し。紋太氏の個人選、文久、馬行兩氏の共選なき六題を課して折柄の夜長を思ふ様作句三昧に浸る。當夜は五六新顔の來會あり、眞摯なる人達の會合であつた事は嬉しい極みであつた。

(二柳子記)

紋太、秋晴、文久、松郎、三平、飯山、一路、三笑、突支坊、久郎、水鏡、京二、川洞、枝呂、遼々、正雄、青影子、山雨樓、眠聲、鮎美、花月、子行、かほる、加香、波郎、雅陶、莢豆、ひろし、万よし、開路馬行、二柳子(名簿より)

貯金 (兼題) 松 郎 選

子供等の分ほち／＼三女房貯め 紋 太
苦しきは子供の貯金までも出し 秋 晴
貯金もう女房の欲しい程たまり 馬 行
譲り店探す妾の貯金帳 文 久
そんなわけにはたまらぬ貯金 山雨樓
調べるご食は貯金帳を持ち 京 二
少うしは貯金の出来るほどあがり 突支坊
一使用人として金貯めてゐる 露 斗
紋付で丁稚の貯金又殖ゐる 川 洞
子をもろて育てる程の貯金出来 久 郎

もうぢきに不動が取る頃を病み ひろし
出不性はたんまり貯めて以來を 波 郎
貯金した歸り炭屋へ寄つておき かほる
君はまだ貯金してゐるだけ偉い 飯 山
ちんまりご長屋の端に金を貯め 子 行
貯金する程の豫算は更になし 莢 豆
弱い女房へ貯金してゐる 同
貯金したあさに淋しさふ感じ 一 路
まだだれも知らぬつもりで貯金 同
ひさり者だあじきなく金を貯め 鮎 美
子がなくてせめてはと云ふ金を貯め 同

思惑の半分貯めて羨まれ 万よし
貯金箱湯銭は借りつ放し也 同

(佳) 髭を剃る弟子頼母と金を貯め 青影子
(佳) 貯金帳女房も意見持つてゐる 子 行
(佳) 利子ばかり云ふて少し貯金 二柳子
(佳) 貯金帳お骨と共に國へ着き 馬 行
(佳) 親類もない身と金を貯め 紋 太
(人) 若死の貯金にあてのあつた 文 久
(地) 貯金する子へ窓口の高すぎる 飯 山
(天) 數人は貯金の高も尋ねられ 佳 山

油虫 (席題)

互 選

油虫秋深うして生きてゐる 紋 太
油虫ほていの腹までのほつて見 鮎 美
油虫ツこれおきかすなく 莢 豆
油虫蠟叩くご向きを變へ 水 鏡
油虫のまじないをする舊家にて かほる
油虫殺しぞこなふ針仕事 波 郎
油虫晩酌の手で押へられ 子 行
油虫叩いた丈で死に切らず 三 平
善なく火箸のがれて油虫 遼々
漆喰塙洗ふに多い油虫 久 郎
油虫榮養不良のやうに死に 眠 聲
油虫さうこが冷けて這ひ廻り 二柳子

寢酒飲む火鉢のふちを油虫 ひろし
 退屈の眼で油虫灰をきせ 京二
 油虫水屋の裏で息をつぎ 馬行
 油虫新世帯さは知らぬなり 同
 油虫せわしく逃けるばかりなり 山雨樓
 此家の陰氣に馴れた油虫 同
 油虫蜘蛛が居るので引返し 青影子
 油虫さつちを見ても廣いごこ 同
 隣から来たものにする油虫 一路
 實驗に都合よく死ぬ油虫 同
 油虫氣にせず親子五人喰ひ 雅幽
 油虫の中に兄弟仲がよし 同
 油虫押へてからも持て餘し 松郎
 油虫きやつご云はしても込み 同
 約束（席題） 紋太選

丁稚さ丁稚約束があり嬉しさう 枝呂
 約束のある座蒲團が揃ひられ 同
 約束をし乍らそこらまで送り 松郎
 約束の時間に早く三味をき 同
 正月を遊ぶ約束皆はずれ 秋晴
 約束はしたが一度考へる 同
 （人）約束にまだ時間ある髭を剃 遼々
 （地）約束をしてる眞上の大時計 馬行
 （天）約束は小使室の火にあたり 飯山
 （軸）約束にその深切を認められ 紋太
 大佛（席題） 互選

大佛の前で團體揃ふなり 同
 汽車の中まだ大佛が眼に残り 松郎
 大佛へ来てまじりの列になり 同
 大佛はゴーン／＼を聞きあきる 馬行
 大佛へ来るさ案内嘘をつき 同
 大佛の裏さ表へ登山服 かほろ
 大佛の裏へ廻るさせむしなり 同
 案内の車夫大佛へそり反り 鮎美
 大佛のうしろで大聲あけて見る 同
 大佛の高さ見上げるだけの事 文久
 大佛へ戀の願ひは慮外なり 同
 屑籠（席題） 文久選

約束をてんからあてにせず別れ 馬行
 指切りをするわさ舞妓茶を濁し 三笑
 いつやらの事も約束云ふてゐる 青影子
 約束に女は髪のを事を云ひ かほろ
 靴なごを拭いて約束待ちあぐみ 飯山
 約束をした譯でなし婚をさり 鮎美
 約束を幹事なんにも云はず詫び 雅幽
 約束へ一幕すぎて顔を見せ 一路
 大佛へ手を合はさずに出立知れ 紋太
 大佛へ蜘蛛の驚く風が吹き 莢豆
 大佛の脇の佛は忘れられ 万よし
 大佛殿へ今日は學者の用があり 枝呂
 寄れるだけ寄つて大佛見上げて居 飯山
 奈良は兩大佛だけを見て 戻り 眠聲
 大佛の門を小さうにくぐるなり 二柳子
 大佛の顔薄暗く蜘蛛が下り 子行
 大佛の下で鉛筆削つて居 雅幽
 大佛に昔の人を感心し 京二
 大佛は彼方の山さ睨み合ひ 水鏡
 大佛の前で巡禮笠をぬぎ 三笑
 足袋の出た紙屑籠を笑はれる 枝呂
 屑籠が目障りになる冬の午後 雅幽
 屑籠にまで惰氣の手がのびる かほろ
 屑籠へまだ強情に云ひ續け 青影子
 屑籠へ入れさすものを取り次を ひろし
 失望の眼は屑籠へ落ちて来る 一路
 屑籠も女氣のない色になり 莢豆
 屑籠に覗きは見ぬほご溜り 紋太
 立腹の手は屑籠へ深く入り 波郎
 あんまりな茶に屑籠へしみ込み 同
 屑籠へ帽子をきせて話し込み 松郎

屑籠につまづいてまた腹を立て 同
 (人)新任の眼に屑籠はミに在り 飯山
 (地)屑籠を一杯にして息子あず かばる
 (天)屑籠へ屑屋の悔みきかさま 茨豆
 (軸)屑籠へ萎うつかりし 文久

屑籠 (席題) 馬行選

屑籠に暇さは見ぬほご溜り 紋太
 屑籠に家宅捜査の眼が光り 秋晴
 失せ物へもう屑籠があるばかり 一路
 屑籠へ捨てた手紙の氣にかゝり 遼々
 屑籠と錢を置いて屑屋去に 飯山
 屑籠を小使もこの釘へかけ 同
 (佳)退け近く倒けた屑籠起し居 波郎
 (佳)屑籠へまだ強性に云ひ續け 青影子
 (佳)新任の眼に屑籠はミに在り 飯山
 (人)屑籠も女氣のない色になり 葵豆
 (地)屑籠へ入れ替を取り次がせ ひろし
 (天)あんまりな茶を屑籠へお返し 波郎
 (軸)屑籠を倒かゝ廻る廻り椅子 馬行
 湯上り(席題) 互選

湯上りの櫛の行手が面白し 同
 湯上りに手つぎり速い髪を梳き 子行
 湯上りに輕う落ちつく部屋蒲團 同
 湯上りの暫し鸚鵡の相手をし ひろし
 湯上りに見る堂島はあがつて居 同
 湯上りの今日から夫かと思ひ 馬行
 湯上りへ淺間は矢張り煙を吐き 同
 湯上りをはしやぎ切て足袋をはき 山雨樓
 湯上りのまあやれ 組む 加香
 うまやの方から湯上り戻つて來 葵豆
 上鬢は風呂で襟だけ塗つて來る 三笑
 湯上りもそこ 〳〵お花か 〳〵來 眠聲
 湯上りの一寸のほして櫛が落ち かほる
 湯上りの座つたこゝが床柱 聞路
 湯上りのもう珍客をまつばかり 二柳子
 湯上りの氣持で女房よく喋べり 京二
 湯上りの按摩仲々氣持よし 久郎
 湯上りは突つて下駄で輕う出る 水鏡
 湯上りが青いみかんを見て戻り 枝呂
 頬べたへ半分塗つて湯を上り 花月
 湯上りへ下女から下女へ用が 青影子
 湯上りは冷たい底の足袋をはき 遼々
 足形をつけつけ湯から湯氣を 川洞

句會

のお歸りにお立寄願上候

道頓堀

万よ

敬白

湯上りを待たされてるはおつた 鮎美
 湯上りの師匠の椽に菊が咲き 同
 湯上りの故郷を話す小半時 万よし
 湯上りの力士に腦みなかりけり 同
 湯上り待ちくたびれた弟子の顔 一路
 湯上りへ歌劇のすんだ騒しさ 同
 藤椅子へ來る湯上りへ下女が 波郎
 湯上りのそれから笑ふ部屋に 同
 湯上りの素足冷たう手を叩き 同
 湯上りの膝に長い長い柿の皮 松郎
 湯上りのうっかり豆の皮を踏み 同
 湯上りへ爪弾膝をにじるなり 同
 湯上りは下宿の膳の音をきく 飯山
 湯上りの母二服ほご喫ひつける 同
 湯上りの兄臺所へぬつて立ち 同

鳥取の莊人吟行

路耶、鳥平、雲谷、二柳子
卯之助、朝陽、双柳、松雨、馬行
眠聲、美の作、萬よし、松耶

秋晴れの十月二十七日、同人朝陽の幹旋で
南海沿線鳥取の莊に本社同人の松茸狩を催
しました。吉岡鳥平、熊谷雲谷氏の二珍客を
交へた上記十三名の一行が、晴れやかな笑
顔で鳥取の莊驛の改札口を出て、葦山へさ足
を向けた。よい鳥ござんなれさ、空ばかりに
らみ乍ら歩く美の作氏の獵人姿、銃獵の趣味
を持つてまだほや／＼の双柳子、鰯の居さ
うな池をくぐさ下のみ物色し乍ら歩く釣竿
を持つた松耶の太公望その奇な對照が、一行
の好話題となり、漫畫家鳥平氏をしてよろこ
ばせること限りがない。

それにかほるさんのしやなり／＼とした
おぼつちやん姿や、大兵肥満の熊谷氏、或は
朝陽氏の雲雀のやうなうら／＼かな聲、等々
誰れかこの一行に足を止さるものあらんや
うである。

目的の山上へ着く。眼下に泉南の沖が見へ
かたへは泉北に至る黄ばみたる平野、空はあ
くまで澄み渡つてゐる。一同はなんだこんな
に近いのかさ歩いてもせないくせに、大きな
さなをいふ。女一人を交じへず、消遊だ／＼と
心のそこからよろこぶ。

葦山へ這入る。「ある／＼」と叫ぶ「何んば
でもあるある」と叫ぶ。「ふむな／＼」と云ひ

たくなる程ほんきに澤山あるので珍らしく
お互ひが子供のやうになる。「朝陽君萬歳」と
手を掲げるものがあり、香りの高い松茸はた
ちまち銘々の籠に溢れた。

設けられたテント、張りの見はらしのいゝ
ところに陣取つてすき鍋を圍む。萬よし君の
用意で白鰯の銚子が湯氣を立てる。蓋が廻る
につれて先づ、路耶氏の快氣焰から初まり、
鳥平、熊谷氏の洒落、美の作氏の聲色、かほる
さんの手踊り、朝陽君の素談、松雨君の滑稽
一人芝居など順次に餘興を興行して、極めて
愉快な一日を過ごした。

○

茸狩にいなこの事も話し合ひ
その茸も取つてさけ社長太い指
茸狩に來て牛も見て池も見て
山の氣が茸になつた説を立て
茸狩に銃と釣竿かついで來
太さをば見くらべてゐる菌狩り
茸狩の最中どこかでさんと打ち
聲色で驛まで歸る茸狩り
おばさんに洒落を教へて茸が煮に
勘定を考へ乍ら一ッ抜き
葦山の下を鳥が舞ふてゐる
山番がこゝにもあると立つてゐる
山の谷さ來るさ茸狩りみんな酔ひ
あの谷の水で茸狩飯をたき
土下座したやうに松茸生はてゐる
松茸山男ばかりの騒ぎなり
松茸がある／＼知れた事を言ひ

路耶 鳥平 朝陽 雲谷 卯之助 松雨 眠聲 馬行 萬よし 二柳子 同 美の作 同 松耶 同

茸狩りに茄子の花が枯れてゐる かほる
茸狩の谷を見らうち火がおこり 同
茸狩の平和な村へ下りて來る 同
尙當日は何かさ便宜を興へられた朝陽氏の
好意を感謝いたします。(S)



俳風柳樽全集

の誤謬に就て

西原 柳 雨

さんまのひものくいさして烏おひ 十七、三十三、上段
たつた一字の烏が馬の間違て其他は全部假名ミ來てゐる其上お
負にくひが、いさあるので殆んどのこから解らぬ『さんま
の干物食ひさして馬追ひ』ミしたら餘り骨が折れぬで理解され
ると思ふ。

おめかけのぶきび旅しやうぞくて着る 十七、三十三、上段
『お妾の不氣味旅裝束で着き』即ち國家老の着京である、最後
のて着るでは何事かさつぱり解らぬ。

何もいわたしませぬ三ツ手敷き 十九、三十三、下段
何もいわは何も居はの誤りにて駕昇が虱も蚤も何も居はいたし
ませぬ、不氣味な襦袢布圍を敷く場合である、

三人で一本糸立にはおぎり 十九、三十八、下段
最後のおぎりはおぎり即ち劣りの誤りにて、三人で一本の傘で
は不足なれども、糸立の席を被つて雨を防ぐには増であるこの
義である、

紙帳でかいたのを下女はいきさおり 一九三五一、上段
『紙帳でかいたを下女はいきさおり』さあるべき句、意義は説

明の限りでない、

歌はうちまき發句ては米をうけ 二〇、三五六、上段

最後のうけはさけの誤り、小町の雨乞ではうちまき米の古名
が下り、其角の雨乞では米が下つたミ、うちまきこのこの語
にて時の新古ミ詞の雅俗ミを表した句作である、

袖づまをひかれしたびに下女なひき 二〇、三六九、上段

原本には『袖づまをひかれしたびに下女なひき』ミありづまミ
たびには濁音はない『引かれし度』にミ解して改めたらし
れど『引かれ次第』にあらざれば意味をなさぬ、即ち『袖姿
を引かれ次第に下女躰き』ミ改むべきである、

はりまやが來たらばさうにあひよふぞ 二〇、三六九、下段

除り假名が多く、然もその假名に誤りがあり、お負けに濁點が
落ちてゐる爲に、甚だしく難解に陥つてゐる、『播磨屋が來た
らば胸に上げようぞ』ミしたらば判然と解る、此句は打入の前
日吉良家の煤掃を云へる句にて、赤穂の浪士で煙草屋に化けて
邸内に入込んでゐたミ云ふ類句が澤山ある、播磨屋は云ふ迄も
なく赤穂の國名の暗示であるミ云ふまでもあるまい、

うりものふしは六郷をこらなり 二〇、三七〇、上段

ふしは富士である、六月一日六郷邸前の富士淺間社を賣物にし
て吉原に行くミ云ふ意にて、頂上まで上らず六合目をこらから
道を變へるミ云ふ二重意義の句である、

きしこくのこをりへさくら植る也 二〇、三六九、上段

『姫氏國の通りへ櫻植る也』ミすれば、猶早く解る、吉原を
東海姫氏の國に擬し、仲の丁の通りに夜櫻を植るこの義である

けびた事だいはきりでが無いといひ 二一、三七四、上段
だいは原本たいさある、蓋し鯛であらう、頭や尾や鰭を切り去
るに少しになる、鰭や此目魚のやうにきりでが無いと云ふ義で
あらう、

見ごもなさちうをつまんで軒に立ち 二一、三七七、上段
ちうは原本ちや字ある、即ち茶字の袴を着てゐる程の立派な
侍が、人の軒に佇んで雨舎りをしてゐるのは見苦しいこの意
かと思ふ、

うす前へおもしろをかける三會目 二一、三八四、上段
原本にも此通りであるが、うす前であるは薄舞にてはなきかと思
ふ、三會目の煙草盆に女郎の知らぬやうに二三兩の床花を入れ
て歸るさいふ類句は澤山ある、されば女郎の喫む煙草の上に小
判云ふ重を置く云ふ義と思はる、薄舞は煙草の名、薄前さ
も書くか其點はまだ調べて見ぬから不明である、

もみぢを賣りしまひごうのいもをうり 三、三八七、下段
ごうはたう即ち唐の間違ひ、正燈寺の紅葉も散り盡して杵ける
物がなく、今度は酉の町を煮出しに使つて吉原に行くこの句で
ある、

やぐら下役者さ女房居る所 二二、四〇〇、上段
女房は女郎の誤

くきづけをくに半日齒をいじり 二二、四〇〇、上段
いいにはくひにの誤「葦漬を食ひに半日齒をいじり」

わけのある勅使を宇治へたてなり 二二、四〇〇、下段
百考解らずわけの語に若し狂句式の意味はなきか若しあるとす
れば宇治では可笑いさ原本を調べて見れば、はつきりさ字、佐さ

ある毎度ながら活字の誤植に餘計な腦力と時間とを潰させらる
ゝには閉口する、

にし木をうすくも直きに取入れる 二二、四〇五、上段
「錦木を薄雲ききに入れる」をすれば直に解る句である、奥
羽の古俗に、思ふ女の門に錦木を立て置き女意あれば夫を取入
れ、意なければ放置しておく、薄雲は高尾に振られた仙臺様を
觀迎した女郎として知られてゐる、

せんたくにこそ上けたれ八百いひ 二二、四〇二、下段
子おろしを下女は八百へかひに行き 二二、四〇七、上段
いづれも八百は原本にも其通りになつてゐるが是は八百屋の誤
りにてはあるまいか、八百にては意味をなさぬやうである、八
百屋とすれば中は八百屋の口入で洗濯の手傳ひに世話した女を
和尚が摘まんだ場合、乙は唐字であらう、

よめさへくは嫁びくにてはなきか、姑の死んだ一週日の牡
丹餅を如何にも嬉しさうに食つてゐるさいふ義かとおもふ、
わざわいさいはいの門でかけもち 二二、四〇七、下段
門でかけもちば原本門でかけもちある夫にてはつきり解る「
災さ」幸の門妾持ち」上の門は災下の門は幸であらう、
そろばんで人をあつめて敵討 一五、二七六、下段

そろばんはそろばん即ち双盤であらう、「明日は敵を討ちます
さ談義僧（安永）の類句、
買つて行くものは品々あるさころ 二二、三九八、上段
買つては賣つての誤り、品川行の煮出しさなるものには目黒も
あれば海安寺もあれば、月も花も旅送りもいろ／＼ある（未元）



川柳塔

○

塚崎 松郎

辯護士にまかして暮をふごころ手
 號外を夫婦火鉢の上で讀み
 我が聲の我にひゞいて夜商人
 恩のある事を女房に云ひきかせ
 雨の晝夫婦の外に蠅が居る
 ひゞり居て嫁ぐ心を試してみん
 夜の空猫でも化けて來さうなり
 赤い襷に春は近づく
 一斤の砂糖に恩を忘れざる

一枚の袷に夫人拜まれる
 土ついた玉子に誠あふれたり
 月給をいたゞいて去ぬ十二月
 姉の戀針箱の中覗くなり
 飲む話の中へたぎんを一つくべ
 丹前にまだ殺されず顔のつや
 銀行の窓へすなほに呼ばれたり
 着ぶくれて養子と見えず店にあり
 尼寺に西日を戀ふる日もあらん
 雀の聲も入れて落葉を掃いてゐる

○ 酒井 駒 人

大島にて(二句)

眞似すれば水は頭で踊つてゐる

島の人等に(一句)

親切を忘れず島を大切に
雨になりさうだから明日にしま
酔ざめの水友達の分も飲め
賣れつ妓が俺の寝顔を眞似て見せ
酒飲の父に似て居る寝顔にて
月末になつて小包だけ居き
ぐつすり寝るのも旅の疲れなり
人名簿一番尻に書かれたり
傘二本忘れたやうに棚にあり

○ 横田 眠 聲

その暮し釦を押せば書生が出
逢ひに行つてやれば支那票ほし云ふ
お隣は菊見わたしは市場まで
罪な人薄情な人さ手紙が來
國の雪のせて直行列車着き
吾がまゝに育ち支那服着てあるき
髪延ばす事がお前の藝術か
敵討讀んでしまふさうさんが出
全快の文かと思ふ封を切り
切れ話わけて其日は寒かりき

冷笑君病む

遅刻する日があり君の病みし後

○ 岩崎 柳 路

皆様の白木屋の馬車走つて居
それつ切り便りが無いさ女給云ひ
つれづれにアトリエで弾くマンドリン
出て行くさ云ふはあいつの癖であり
急所をば外れて女生きてゐる
合部屋の女優へ意氣な博多帶

○ 三好 革 郎

首齧りの相談すまし酒にする
自分から責任持つてさて困り
賣出しのチラシ黙つて貰つたが
やア君か上れくさ門を締め

○ 檜山 千代 二

三年も會はない親におくりもの
小包へたまたま書いた母の文字
それぞれの握手健在であれかし

○ 林田 馬 行

丸髻の手込めの果てに見ぬまいが
淋しくも話はいつか腕づくに
静かな筈だ蟻を見てゐる走り元
動物園へ來て人間を見せられる

臺所の暗さに夫ゐるたまらず
佛壇に向ひ合せの掛時計
お経忘れず——如才なく
あいにくさ答へるばかりあけに來ず
塗枕明けるを待たで見えずなりぬ
もう一度見るミステツキ振つてゆく
叫ばんさすれば佩劍迫り來る
若い云ふのへ返事せずにおく

○ 井上 刀 三

神妙にすればいくぢがないさいふ
後朝を欺しおほせて疲れてる
ゆくりなく彼女の夫云ふに會ひ
別れても女にはまだ行く道もある
金持の苦勞云ふをしてみたし
かりそめの風邪がもて詩集出る
慰めてやれば子のある仲居なり
おろそかな晝をまごろむ鳥なる

○ 高橋 かほる

惚れられる大工さんぎを煙たがり
埋立地煉瓦賣りますなご書き
信貴山へひかされたのに誘はれる
大阪で生れ年より若う見ね
鹽こぶでぶつづけにする芝居好き
人妻の晝の電車につましく
糸ごむを子の無い夫婦貯めて置き
湯豆腐が來てしやんさする置炬燵

○ 寂光集 黒木 莢 豆

寂光のなみだしんしん赤椿
寂光の泣けば涙に粕ができ
寂光の死ぬより外になかりけり
寂光のころからよべば母一人
寂光の妹のかほの消えたさこ
寂光のこんこんちぎちんこんちぎちん
寂光のいんいんちぎちんちぎちん
寂光のの中に狐の眼の深さ
寂光の座りや奈落の底がみね
寂滅爲樂頓生菩提ほれてゐる
寂光の不思議なごでほれてゐる

○ 麻生 蔑 乃

冬の田の廣さを見せてからす飛び
客蕎麦の家に残したつばめの巢
ねんねこさ仲よい冬を續けて來

○ 橋本 二 柳 子

停車場若い女が立つてゐる
繁昌な通りで老人立止り
満願に女は若さ思ふてゐる
失職は色が白うて嫁がれず
願ひ事の外おみくじも面白し
雨降つて姉も弟も宅にゐる



或るビルディングの 階上にて

(東京同人小集)

靴と近眼

ゴム靴の人生僅か五十年
靴音は高しごつかの歸りなり
近眼の博士は握手したばかり
アパートでござのつまりは靴をぬぎ
靴音をきゝわけてゐるむつまじさ
帝展でちかめの看守にさがめられ
白靴で今日大阪の土を踏み
米久で日曜さいふ靴を見る
ゴム靴のちゝ無遠慮な水たまり
社長ふみ靴が汚ないなと思ひ
曾我廼家に見る近眼の面白さ

路 同 同 同 同 千代二 同 同 路
郎 人 人 人 人 郎 郎 郎

路郎先生が十一月三日に來京せられて、四日の夜は拙宅に一泊されい
ろ／＼川柳の談や同人の消息を伺ひました。七日の日曜は新に同人に
加はつた千代二君と千葉から中野に移つた駒人君と小生と三人で先生
を迎へて小宴後他に席を移して同人小集をひらきました。夜に入つて
から記念の撮影をしました。そして七時三十分の下關行で三人は先生
と暫らくの別れをいたしました。何れ來春は三人で出かけることを約
しながら。(東京支部 岩崎柳路)

【寫眞説明】

向つて右から 千代二、路郎師、柳路、駒人



追

馬行氏から故伊藤夜叉郎君の事を何か書かぬかと思越された自分はいくらでも紙面がゆるされるだけ、心行くまで書きたい心持で居る。既にみの作君が書かれたけれども、敢て馬行氏の申越しに甘へて、自分の川柳の畏友であり、酒の友であつた夜叉郎の面影、ありし日の面影を偲びつゝ筆をすゝめてみやう。

野球を見るに夜叉郎をすぐ思ふ程 私と同じ様な野球ファンであつた、私が時々發表する、柳風スポーツも實は夜叉郎——これから彼と呼ぶ事にしやう（夜叉郎はよく「彼は實にやるよ用ゐるね」なご云ふ言葉をつかつた、吾々もよく亦彼云ふ言葉を用ゐた、たからいつそ懐かしみが湧く）彼と私とで『花束』へ野球吟云ふのを載せたのが抑の始りである。其時は久良岐翁が非常な熱心さであつて爲に選句は、中々の嚴選であつた。それでダン——吾々の句が消される、投句が全部載る

憶

森 東 魚

なご云ふ事は望外の沙汰であつた。そこで彼が一計を案じたのであつた、それは九段翁は當時野球の事は流石に分らなかつた、で野球の句を別に一欄占領して載せれば大丈夫一句も消されまい云ふのである。常に、みの作君の所謂、彼の茶氣満振りを發揮したものであつた。これは全く圖に當つて一句も消されず二人の句を並べる事が出来たのであつた、彼が十四句、私が八句で一頁三段組の一段を占めたのである。其中の彼の句を少し挙げてみやう

練習はバンドがすむと陣を引き
セコンドミシヨート堂々めぐりをし
ツイスリーサインを投手軽く受け
犠牲打の一壘さして馳けはかけ
満塁はダブルプレーが禁句なり
物云ひヘキャツチ、マスクのまゝ走り
其後川柳詩を出してからも時々野球の句を咏んでゐた、病床に

横たはつて、好きな野球が見られなくなつてからも野球の事は忘れなかつたやうである、最後は確か今年の春シーズンの魁として大毎チームが東上した時であつたと思ふ、病床から私に寄せた端書に

大毎の野球部が来て春になり

ミ云ふ句を記してよこした(今、其書信を失つたから或は句は少し違つてゐるかもしれない)先日(今日)の悲壯であつた早慶戦の話だけでも聞かしてやりたい氣がする。

酒に關する思出は全く限りがない、私が腎臓を病んで滿二年酒を廢した時、私が或る篆刻家から貰つた、酒泉侯ミ云ふ印を彼に贈つた、贈られた彼は既に泉下の人ミなつてしまつた、贈つた私は、復もこの如く酒に親んでゐる。ひし／＼悲しさに打たれる。私は今、亂雑な机の抽斗を索して、彼の病床から私に寄せた信書を見當るまゝに集めてみた。昨年八月十日付の端書は次の如くである。

昨夜は御來訪下され久々にて闊談洵に愉快を覺へ申候難有御禮申上候其節の「奥様ミ三句に渡る美しさ」は貴説正しく候。今晩後架にて(御免)「美しさ」が氣心の美しさなるに想到致し候、今迄は單に肉體の美しさのみに執着候爲邪魔に陥り面目なく候、つまり御めかけの事かミ存じ候、それであつて奥様ミ何等のいさ／＼さなくすんなりミやつて行く心ばへを云つたものかミ被考候

廁に上つて、前夜私の話した句義を思ひ起して、然も(御免)

ミ書いてゐる彼の心持が嬉しい事である、川柳に精進してゐた彼の面影が躍如としてゐる。同じく二十二日に又華書が來てゐる、それは私が川柳都誌に書いた一稿を讀んでの上のものである。

(上略)氷室の句武玉川で見た「氷室ふさぐに潤六月」ミいふがあり、現代の流行語トモ何々ミいふ、武玉川に「ミても濁るを飲めば玉川」ミあり死語復活も面白や。みの作の作りさうな句「大伽藍相撲小さく手を合せ」武玉川は讀んで面白し、以上皆十八編の句

病床の友として武玉川を讀んで、愈々面白さを感じたのである但「ミても」の意味合は現今のミは違ふ事は深く考へなかつたのかも知れない、華書の簡單な文句ではよく分らない。が如何に彼が武玉川を愛誦してゐたかは偲ぶ事が出来る。次に昨年十一月十日付のがある。それは又病勢が進んで岩島病院に入院して手術を受けた當時である。

人戀し背骨のいたむ夕暮は電氣の如く人の待たる、硝子戸に黒き影さしこつ／＼うつつ音すれば心おぎるも瘦骨の据ゑさころなく痛みつゝあけ方を待つ淋しき心

(仰臥漫歌)

此の三首を記して、更に、私が各柳誌の原稿を書き了るまで無沙汰するミ申送つたのに對して「締切に追はれるはミの男ふり」の一句を添へてよこしたのであつた。病院の、わけて淋しい夕暮に仰臥してゐて、ぎん／＼にか友の來るのを待つてゐた事であ

つたらう、せめて一刻も早く電燈のこもれかしこ願つた事であつたらう「あけ方を待つ淋しき心」何んぞ云ふ痛ましい叫びであらう。私は當時友人の醫師に彼の病状を話して胸のふさがる思ひをした、それは醫師の云ふには、直接診察しない故めつたな事は云はれぬが、餘命半歳をさうであらうか云ふのであつた、然し私は、極めて彼親しい二三の人に密かに訴へるより何ともする事が出来なかつた、さうかして、せめて元氣な中に何まか慰めてやりたいと思つた。さうして私は倉皇として筆をこつて「換果篇」の稿を本年一月の鹹鏝に寄せて、私の飾りなき夜叉郎禮讃を發表したのである、それが、物質的にさうにも出来ぬ私のせめての思ひやりであつた。其後私の杞憂を裏切つて彼は、すんく快い方へ迎つた。私はホツとした、そして、彼は私の換果篇に對して自らペンをこつて喜んだ手紙をよこした。

(上略) 鹹鏝の換果篇ありがたく忝なく存じ候、鹽瀬風月榮太樓を買占めて大八車に積みこんでサアおあがり云はれたより全く嬉しく奉存候。やつぱり東魚は俺を知つてゐる……ご自惚れ候、此の儘うぬはれさせて當分置いて下され度候(中略)二三の神者にはシルコなご出して朝よりの酔をさませせて、果ては飯の味をたへさせ例の古句「飯はよいもの」の講釋も聞かせ膳を冷させ候も一興に御座候(下略)

これは本年一月八日付である。次いで一月二十三日によこしたのが今私がさがし出した最後の書信である、此の頃は又太分良くなつてゐたさみねて冒頭に——此の手紙は久しぶりでうつつ向いて書く第一信です、今迄は悉く仰臥執筆であります書いてゐる、私の暮に生れた三男に喜びをよせて呉れたもので諧謔の一句が記してあつた、かうして段々快方に向つて居た様なので吾々も安心して、何やかやに取紛れて不沙汰を重ねてゐるうちに、又々病勢が悪化して遂に再び起つ事が出来なくなつてしまつたのである。矢ッ張り駄目だつたのか……私は計報を得てたゞさう思つた、さうして昨年耳にした友の醫者の言葉を思ひ起した、一時安心した事は、僅かに時間の長短を憂へ或は喜ぶに過ぎなかつた事が、冷たく淋しく感ぜられた。彼が枕頭に常に置く事を忘れなかつた句帳に、最後に人に筆を取らせて「病人の見て置く醫者の鼻の穴」の一句を残したのは臨終に先立つ旬餘日であつた。謹んで私は川柳の畏友夜叉郎の冥福を祈る、さうして私は鹽まらぬ換果篇を喜んで呉れた事をせめても私自身の慰めの思ひ出す。 (大正十五・一・一二稿)

あの健實そのものやうな夜叉郎さんの句がもう見られないと思ふさ感慨無量です。「川柳詩」復活の噂を聞いてゐた私は、氏の死に依つて是が頓座を柳壇のために悲しむさゝもに爰に裏悼の意を表しておきます。(馬行生)

旬

篠原春雨選

葬式の日は老人に逆らはず
預金帳老人孫へソツト見せ
老人に聞かせぬ事のある暮し
舞扇借りて昔を頷かせ
政界を去つて家庭の好々爺
當年の意氣あり老人イヤがられ
それ以來有田晋松爺は寝め
鐵無地の後姿が老けて見え
老人は石牌の形を見て通り
老夫婦只生きてゐるだけに見
餘生只念佛に身を捧げてゐ
道聞いてから老人をふり返り
子が密つて來て長命を祝ふなり
山水の橋に老人景を成り
短冊を老眼鏡で見える茶室
花園のあひに白髪が見かくれ
佛壇を買ふ親分の禿けた事
御隠居の暮四五日を店へ來る
老人の逆様事にまた出會ひ
(佳)御迎ひがまだ來ません
(佳)祖父の代から我慢老下男
(佳)父として老人としてだいたい

同 殘 紅
同 光 路
同 三 志 郎
同 山 月
同 千 鳥
同 史 朗
同 濁 水
同 萬 好
同 利 劍 坊
同 史 朗

馬行生係

(一)姓名 (二)雅號 (三)別號 (四)現住所
(五)生年月日 (六)職業 (七)好きな句 (八)
好きなタイプの女 (九)自信の句 (一〇)川
柳以外の趣味 (一一)配遇者の有無 (一二)嫌
ひなもの (一三)川柳に手を染めた年月

(112) 森井荷十

(二)森井嘉十郎(二)荷十(三)もさ六疊坊
竹林堂、坂本非人その他いろ／＼あり
(四)東京市下谷區坂本町一丁目八番地
(五)明治十八年一月三日生(六)會社店
(帝國倉庫運輸株式會社、東京に支店の
ある方の御利用を願ひます)(七)今思ひ
出せません(八)日本髪ばかり結ぶ草履を
穿いて似合ふ大柄な女、ハイカラは嫌ひ
(九)自信の句はまだなし(一〇)日本畫鑑
賞、美術を好む(一一)有り男二人女三人
の子供あり(一二)ブル人(一三)明治三十
九年頃

(113) 古澤清公子

(一)古澤清司(二)清公子(三)柳小路清麿
(是は俳諧に)清子、清九郎(是は俳句、
短歌なきに)この外氣まぐれに澤山あり
(四)神戸市北狭通八丁目九七(五)明治
卅三年八月一日生(六)その日暮し(七)露
ねられる一寸困ります(八)俯いて叱ら
れぶりのいゝ女房：かうしたタイプ的女

(佳)長生はたくなきツイと立ち
(佳)老衰へ醫者は氣の無い脈を
(人)寢酒の欲し年寄を母に持ち
大夢子 天花 突支坊

金持

井上 刀三 共選
西垣 松雨

◇ 刀三選
金持の近頃靜座法をやり
利子だけで喰つてく家の門構へ
塵積つて金持今日こなり
ぢつとして居れば金持金が殖ぬ
冷酷を石に圍んで金があり
金持をみんな阿呆にしてしまひ
町で指折られぬ内は金が殖ぬ
四目になつて税金減りかゝり
競馬では金持惜しけもなく取られ
金持の息子にも戀は淋しき
畔道も金持らしう歩くなり
金持は一番地味な下駄へ下り
金持にこの頃別な慾が出來
富んでから世間の人を怖くみる
金持の息子私立へ通つて
お厭ひのない物持の赤切符
借りに來た事を金持素つ破抜き
金持の父も母体に障るさか
金持になれば善人嘘を云ひ
眠聲 天花 天花
ひさご 其象 利劍坊
拔天 山花紅 濁水
一路 史朗 龜珍
柳秀 彩秋 突支坊
光路 秋三

(地)老人に水晶の珠數派手過ぎ
(天)丁髷の時代の祖父は色男
讚柳 彩秋

自動車の這入つた門を振り返り
結構ですなあ金持金持
金持のもうラヂオにも飽いて
チト遊びなはれ金持同言言ひ
値切つて流石金持
金持の二代目からが奥床し
合名にする程出來て旅ばかり
(五客)金持は爭議の戦後で出し
(同)金持の養子控へ目勝ちに
(同)今で其金持を悪く云ひ
(同)金持の宅へ金持來て招かれ
(同)足がない様に金持暮して
(人)金持が叩く煙草の庭續き
(地)金持も背を突かれた満員車
(天)その夢を金持笑ひながら
(軸)金持へすまないやうに火
(同)金持の前に意久地の亭主
大夢子 鮎美 三志郎
同 万よし 一路 史朗
案山子 山月 澁面子
秋三 一路 千鳥
刀三 同 松雨
天花 其象

なら(九)おこがましくて申しかねます
(一〇)長明(目下修業中)清元、一中、常盤津、舞踊、義太夫、その他いろいろ餘り趣味が多くて困ります(一一)有りません(一二)琵琶(但し薩摩はこの限りにあらず)映畫、浪花節、女の洋服(一三)東洋鬼なき同年、多分大正十年か十一年の又新川柳大會が初めてです「黒梓へ薄い親類までも出る」これが處女作です。

(一三)志村 天花

(一)志村傳藏(二)天花(三)空々人、詩村紫村(短歌に用ふ)(四)山梨縣中巨摩郡鏡中條村五七三(五)明治三十五年一月二十四日生(六)米穀肥料商(六)稻光り惚れてる方へお、恐い(二)度讀んでても電報ハ、キトク(御主人は御留守で御座る石の音)「行く末の事は其のまゝ夢に入り」「不足を云ふな九月一日等數へ切れぬ程有りますが要するに川柳家以外の人にも一讀うなづけて深刻味のある句(八)温順で勝氣のある女愛嬌があり軽い世辭の一つも言ふ要するに商人向の女(九)折々選者によつて裏切られる自信の句のみ多きを悲しみます(一〇)文藝、運動競技、一般、角力(一一)(八)の如き女が有つたなら御世話して戴けないものでせうか?(一二)眼鏡の女、流し眼、自惚の強い女先生になりたる川柳家(一三)私の十六の容兒の作句を真似て山梨日々柳壇へ投

冷酷を石に圍んで金があり 利劍坊
 金持の元は紀州の藥賣り 朝陽
 おそまつな事金持の貰入 案山子
 嘲つて居る金持に世辭を言ひ 抜天
 際限もなく金持に慾があり 志郎
 登記所であらう笑ふ程になり 龜珍
 金持の息子でないさ村が褒め 秋三
 病床へ金持の伯父便りなし 盗面子
 妾宅へ人目をしのぶ金を持ち 濁水
 番頭は自分の金の様に言ひ 柳造
 財産があるばかりにもめて 彩秋
 お厭ひのない物持の赤切符 突子坊
 金持を氣の毒に香具師は言ひ 柳秀
 強盜の記事を金持寒う見る 天慙
 金持がなんださ父のいかりやう 光路
 唸る程只では遣れぬ金となり 大夢子
 金持の子はスタートでもう後れ 結構ですなア金持さ金持 鮎美
 一口金二口金さいふい暮し 山花紅
 金持に出入の者の蔭日向 同
 米國で儲けて來たを聴かされる 山月
 金持になかくなれぬ汗を拭き 同
 新らしい本を恐れて金があり 万よし
 金持の子忍術で倒ける役 同
 往診がすぐに來て居る金を持ち 眠聲
 金ですむ事さ金持別れる氣 同

金持について人つた天賞堂 一路
 金持は進まぬ筆で五圓なり 同
 勝手口金持の犬瘦せてゐる 史朗
 あんな事して金持の子は遊び 同
 厚司着てゐて一萬も持つて居り 同
 (軸)金持と言はれて孫は亦數へ 松雨
 金持が刻まれて居る御境内 同

年賀廣告を募る

◇ 奮て申込まれたし ◇

柳友交誼のため左の便法を設く。

◆ 一口 金五拾錢 【二頁の十】

幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方
 に限り金五圓。一口分の原稿はなるべく
 簡単に願ひます。

◇ 申込期限十二月十日迄 【別年の特】

大阪市港區八條通二丁目十二番地
 事務所 川柳雜誌社

振替内阪七五〇五〇番

稿したのが始まり。

(一五) 兼重白鷗

(一) 兼重文吉 (二) 白鷗 (三) なし (四) 山口
 縣都濃郡富岡村 (五) 明治卅二年一月一日
 生 (猿面秀吉公の出生日と同じ今の場合
 村長になれる見込もなし) (六) 綿布御
 (七) 「骸骨のきこに小町の花の色」 劍花
 坊 (逢曳に過ぎる十分十五分煙之助) 金
 借りに行けば有馬の夏に聞く路郎 (八)
 自分が過去の苦しい話をする時じつと聽
 いて呉れる女、下町風の女、湯上りを欄
 にもたれて襟首の白い所を見る時は喰ひ
 つきたい氣持、自分が妻と決めた女を一
 度そうして飽かず眺めたい、二三年の内
 に (九) 年末までに作つて見る決心だが頼
 りない (一〇) 明日の米代に差支つても野
 球だけは見逃さぬ、其他あらゆる競技
 (一一) 鐵の草鞋で探してゐます、御世話
 有度し (一二) 大家振つてあごで物云ふ人
 金持の横柄 (一三) 大正十年山口赤十字病
 院に入院中ふさ柳川洲馬氏と親意にして
 頂き、柳誌を貸して貰つたり洲馬氏の供
 して例會を覗いたり、一つは洲馬氏の打
 解けた御人物にぞつこん参りましたので
 知らず川柳と離れられなくなりま
 した。

つかめぬ心

安川 久流 美

十一月一日「何ミなく静かな夜です。向ひの床屋で顔をすつきり剃つて貰つたら、氣持がよくなつたのでベンを動かします。」

路郎氏の疊み句のことが頭にこびりつたのか知らないが、私はきのふ社で一句作りました。

◇お互の理窟は金が欲しい金が欲しいといふのです。新しく職を求めた所が新聞社の校正部——一度あふて夜叉郎君と同じく感じのよい好印象を與へられた當百さん、慥か同じい仕事——人生の裏面がまさしく展開される、今の私には斯うした句が浮ぶのです。恐らく金がほしくないといふ人間があるたら、それは屹度嘘をつくのです。月並文句だが地獄の道も金次第、重い罪もこの代物でいさゝかなりさ

も薄らぐ世の中です。

◇黄金の光りに靈は消へ失せる

三好幸郎君の

「石川や濱の真砂はつきるこも」……から、貧乏人のある間川柳は榮へるこは、實に川柳以上の穿つた文句です。貧乏歌人の石川啄木氏も生きてゐたら、屹度現代川柳家になつてゐたらうと思ふ。白蓮や勇の、百人一首の成りぞこないのやうな戀文句を並べてゐる歌壇に愛想を盡かして……。

白蓮といへば東京の一流新聞に輝子の小説が、その名に引きずられて喝采をうけてゐる。よんで見るに甘い。甘い。斯うしたみにくい自己告白の、だら／＼引きのばし小説に興味をもつ現代若人を、ある一面から氣の毒のやうにも思ふ。

大毎の『きのふけふ』と大朝の『ブリズム』が、最も一般に多くよまれるといふ

ここを想像するに、一句でも川柳味の川柳を、この世の中に蒔いて置きたいと考へる。

しかし却々さういふ句は作れるものじやない。想は掴んでも用語に苦しむ。スラ／＼吐けば單調なもの、川柳の研究。迷宮に入れば入るほごびづかしくなる。

私の頭も根が斷片的に出來上つてゐるから、長いものには自づと倦怠をおほへる。ちぎれ雲のやうに次から次へ——川柳家の顔が浮いたり、未來の川柳を考へたりする。これは病的と思し召されたい。で、このあごは句を並べて今夜はお休みにします。

床屋の時計が十二時を打つ。

わが顔に油斷があつて油斷なし。さうしてもつかめぬ心ばかりなり。紫の煙いんまの嘘をのせ

(十一月一日朝)

柳雨「誤謬に就而」(二)

竹馬居主人

▲花嫁はかこうの中で茶づけ也

原本の「か」の字はいくらも前例がある故「和」を印刷するのは出版者の不親切である。翁は「園ふの中」即ち屏風の中でお解きになったが、余は「佳有」であるを今迄思つてゐた。

▲文せんを妾そばからひつたくり

川柳集には殊更に「文」にブンシルビがつけてある。モンゼンに濁るべきである

▲山もりに盛つたすすきを二はいくひ

▲すんごうのすすきやんこ范蠡はよび

前句ススキは酢菰なりこのお説なるが、余は蠡で膽を解してゐる。搜神記に公笑

顧衆賓白、今日高會、珍羞略備、所少者

吳松江鱈魚爲膾こある(公は曹操の事)

赤壁賦の客曰、今者畢網得魚、巨口細鱗

狀如松江之鱈、シヨウコウノロミ中學な

ぎでは讀ませてる。本式はズンコウノ

ロである。其味天下に優るこ、松江は江

蘇省松江府に在り。但し前句に對しては自ら満足な解が得られない異説もある。

▲本能寺じやうは横手をはたさうち

紹巴の事で人名を假名でかくのは徒らに後進者を苦しめるのみ。紹はセウでシヨウ

ウミよび。

▲下女がさがるでかみ合がたねぬ也

サカルをツルムの意にお探りになつたが縁語關係からはさうであるかもしれぬ。

私解はサカルは榮る 時めく即ち下女の勢力が細君を超えてきたので家庭の紛擾。

▲簡略はさうるのおごきちひ也

勘略なりこのお説なるも余は簡略で可なりと思ふ。論語に言伯子能爲簡略之行

ある。手輕にする事、手数を省く事、つづまやかなる事で、務舉大綱簡略奇細な

さもある。(因に勘略は屋根を棧瓦にて贅くもの丸瓦を用るす、近世風俗志參照)

▲さりの町江戸をくらつたさうが見ぬ

お説の如く胴でありましよう。博奕の席

をかし打歩をさる事を胴取さ云ふ。元來は筒取から出たものでしよう、筒はバク

チの賽を入れて振出す筒の事。

▲すずで袖ふるからごぼりくせき

つづ説敬服。

十九二十若衆にしては老の阪

つづやそこらでやれくなく

さのさのさに通じ、一つ二つのツを添へて云つたもので十箇の轉、つづや二十

歳或は十九の意に用ゐられてゐる。

▲八疊に願て母は叱られる

曾て同編を寫せし時、明かに原本願の字でありました。

▲輕くいづても八丈がものはあり

無論此の八丈の含著は戀娘昔八丈でありましよう。

▲句作だご繩を諸卿へむけてやり

本誌の分が大變誤植

手作だご繩を諸卿へわけてやり

▲きなかにもならず六部は七里行き

貴説贊「六字をば七里けつばいうけつ

す」下總さありしは上總の誤り「丈けの

ない國に七里さ九十九里」(十一月三日)

柳雨氏の

「誹風柳樽全集の

誤謬に就て」

花岡百樹

花嫁は和こうの中で茶づけ也

原本の和云ふ字が一才和の字に訓める云々さあつて是は園の中即ち屏風なごで園ふた中で花嫁が茶づつてゐる句義である。成程原本では和の字の様に書いてあるが、是は全くかて園ではなく佳者である。婚禮の宵から翌日へかけて朝類其他の招客は山海の珍味でもてなされて居るに、花嫁の女は獨り料理の餘り物か何かで茶漬をたべて居るさいふのである。又佳者でなければ茶漬が意味をなさぬばかりでなく園ひの中さいふ語はあるが園ふの中では語を成さぬのである。

さりひ町江戸をくらつたさうが見

原本にはさうさあるのは柳雨氏のお説の通りで亦胴三解すべく、酉の町の賭場三解すべきことも同意である。昔江戸構に

の刑に處せられたのを江戸をくらつたさう云ふたのである。江戸構にさは江戸退去で事實江戸の市中に隠れ住んで居ても外出の時に草鞋を穿いて居れば途中で役人に物色されて今江戸を通過して旅行する途上ださか、又は親の墓参に江戸へ出て來ましたさか言ひ譯をすれば濟んだのである。此句意は江戸構に喰つた博徒が酉の町の賭場へ出て胴をこつて居るのである。

をさりさんお近づきに三會目

原本には確におさりさんである。句解も亦遣手の事をお取さん洒落たのであらうが、私は猶これが三度目の酉の町即ち一の酉から三の酉まで續いて行つた客に對しての場合三解したい。

眞實と技巧

林田馬行

暫くたつしやであるさ、ちつと病氣になつて呉れないかなさと思ふものですねこの間近頃減多にひいた事のない風

邪に見舞はれて三日ばかり寝込んだのですが今度の三日間は矢つ張り私に収つて嬉しいものでした。川柳云ふものを知つてからの私は、たつしやな時も病氣の時も、一種云はれぬ心強さを持つて生きて行ける事が出來ます。

寝ながらいろ／＼自分の川柳さ、ひの川柳に就いて考へて見ましたがね。

さうも僕には今の柳壇をおほまかに二分して内容と表現の戦ひであるとも云ひ得ると思ひますね。即ちより深い内容に生きんさする理想を抱いて常に是か神秘的な表現の力に壓せられながら尙たゆまざる努力を以て彼岸に達せんさする一派さ、兎に角にも古川柳の表現を以て完成されたものと見て是によりよき内容を盛らんさしながら多く平淡、空虚の誹をうけなければならぬ結果を饑しつゝも尙屈せぬ努力を以て理想境に近づいて行かうとする一派、即ちこの二つの勢力が相交錯しこんがらがつて現柳壇を構成してゐるさとも云ひ得ると思ひますね。

この二つの勢力が常にその足りざるを補ふ事のみに争闘し相反目する事は川柳向上のために意義深い事と思ひます。

この場合前者は非常に冒險な位置にありますね。一たび成功すれば、北極探險の覇者のそれに似た輝かしい世界の人となり得る代りに一朝失敗したら命がないですね、浮ばれませんね。いや川柳の北極は一つだけではないのですからね。一つを極めてたらまた次の極地に向つて進まなければならぬのですから一生の仕事ですね。こゝに人生の面白さがあるわけですね、これに比べるに後者はてんから北極探險なごをやらう云ふ氣は微塵もありませんね。まづ日本アルプス、精々ほんもの、アルプス位ですね。つまりアルプス程度を數で行かうとするのですね。ですから成功した處で北極探險のその如き輝かしさはない代りに命に別狀はありませんね、間違ひがありませんね。然もこのアルプス程度で命に別狀のある人はほんごにさうかしてゐますね。

内容に表現云ふ事に次いで思ひ出されるのは眞實な技巧云ふ言葉ですね。眞實、このまごの籠らぬ作品には頭を下ける事が出来ませんね。詩人はまづまごしたれと叫びます。いや是は私が今更らしく云ふまでもなく、俳人の鬼貫、歌人の景樹等に依つて古くから叫ばれてゐますが、まごの尊さは所詮まごの尊さにほかなりませんね。或詩人は云ひます。眞實たれ。眞實の前にはあらゆるものも光りを失ふであらう、然し乍ら古來を通じて眞實を強調した詩人は多く藝術に於ける技巧を輕視或は無視せんとする嫌ひがありますね。即ち

無言のうちに……ですね。

子供が叫ぶ、その叫びは眞實でせう。その眞實がいちのちなのです。けれごその叫びがたゞ藝術であつても、それがよりよき藝術であるとは思へませんね。つまりそこへ最もふさわしい自然の技巧を加へてこゝによりよき藝術が完成されるわけではないのですか。詩人は多く技巧云ふ言葉を嫌ひますね。けれど結局技

巧は抹殺する事の出来ぬ事實なのですからね。つまり

無言のうちに……ですね。

なのですからね。この眞實な技巧は丁度藝術に於ける天婦のやうなものです。その作品に於ける技巧の有無は差おいて聲を大きく技巧を提唱する詩人はあまり見あたりませんね。それは眞實の傷つけらる事を怖れるからです。詩壇の驍將北原白秋氏はあれだけの詩才を以て尙その作品に眞實を要求せられてゐる事はよく人の知るごころです。それは氏の作品が技巧に於て人一倍すぐれてゐるために、かゝる諷刺をうけるのでせうけれど、尙氏の作品に時として眞味の少い事も事實なのでせう。さて一たび眼を川柳に轉じます。

既往並びに現柳壇は成程技巧川柳の横行でごを押し、眞實なごは見當りませんね。それは川柳云ふ名に依つて遊んでゐるからなのです。嘆かばしい次第ですね。(一一・二三夜記)

新戎橋より

万よし生

池水動かざれば子生じ、土壤耕さざれば雜草茂る。熟々現代を相するに、劇に、映畫に、大衆文藝に、各派美術展に清きに見ゆるに子生じ、青きが中に雜草榮ゆ。政黨も行きつまつてゐる。財界も沈み切つてゐる。和歌も俳句も、もくばかりで啄木、子規の生氣はない。大切開の手術を要するもの皆然り。柳界はこの繁園氣の中に封じ込められて手も足も出ないのが僞らざる真相である。相互交換の柳誌が、一町に一種宛發行せられたさて、週間朝日の懸賞川柳が机上山をなしたさて、花火線香が隣間の椽先を色ざるに過ぎない。大地を照す月光でもなければ、群星を率ゐる明星でもない。不振の文壇への水平運動をするにしても、川柳家が少し向上して、文壇の中心に堂々一家をなさねば、文壇の方から道連御免さ来る筈だ。作句の範圍も、妾宅、二階借り、大家

路次等々から飛び出さねばならぬ。作句の様式も氣味があり、やうに見え、いなり等々を突破せねばならぬ。宣傳も床屋を放れて智識階級の本陣を突かねばならぬ。柳論も人間の天性、藝術の本質にまでつき進まねばならぬ。金を儲けるのさへ一三通りでない苦しみがあつたから、永遠に働く一句を得るに、夢や幻の沙汰ではない。柳界の維新には、吉田松陰の意氣さ、西郷南洲の力さが要求せられてゐます。この革命兒を若い川柳家から見出し、啓發し、大成せしむることは、不完全なる百句を毎月印刷せられるより吾等に取つて有意義な仕事である。日暮れて道遠し。これから暗黒の夜を過ぎさなければ朝日は見られない事を自覺せねばならぬ。完美した川柳の殿堂を建設するには儼い祠をぶつ毀さねばならぬ。古い維木は切り拂はねばならぬ。幅飛びの要領は強く屈して勇ましく踏切るこゝだ。明日埋められる墓穴を自分で

掘つて行くのは馬鹿の骨頂ではないか。川柳家は人が宜いさふのは、何時もけらく笑ふこゝではない。自分の地位も名譽も捨て、テコでも動かぬ地獄の中心まで掘り返すのだ。茲に基礎工事を構へて、始めて川柳殿堂の摩天閣が築設せられるのである、

大島から

酒井 駒 人

鳥へ来てもう二日、なにも見る物がなく、聞くものいへば、鳥の名物大島節を一時一圓五十錢出して唄ひ手云ふ女を呼ぶより外にないのです。藝者は居ません。たゞ唄ふだけです。何んかな物足りない感じがしますが、かへつて此の方が鳥の情趣があつてよいでせう。昨夜其女を呼びました。二十五歳だ。申しましたがもつと若く見えました。伊豆の國下田の生れださうです。(大島も伊豆の國ですが) 名前はお千代さん云つて可愛らしい顔をして居りました。

お千代さんが唄ふ時に、自分に向ひ「手を打て呉れ」と云ふから手を打つてやつたら

妾しや大島御神火育ち

胸に煙りはたわやせぬ

其聲が又なんさなく悲しく此ま自分死んで行くやうな聲でしたので思はず手を打つのをよしましたら、お千代さんは手を打つてご申しましたが、もう悲しくなつて手を打つ氣にもならず其ま唄を聞いて居ました。今度は女中が自分の代りに打ちはじめました。なんさ云ふ悲しい節、天國で聞くやうな聲なのでせう。

港島此の二字だけでも情趣たつぷりなのに……なんでも二十近く唄つてお千代さんは歸つて行きました。聲のよいのでは島で一番ださ女中の話です。旅館は外にもありますが、好きな川柳に縁のある名前の「柳川館」にいたしました。梅の花咲く頃は一月中旬から二月下旬ださの事です。其時には父来ようかと思つて居ます。島のアノコ(女の事です)が頭

へ水を入れた桶を乗せたり、荷物を乗せて今着いた汽船から荷物を運んで居るのも大島情趣の二ツです。

都人士になれて居る善の島の人々は親切で純朴で、そして原始的なのも嬉しいもの、一ツです。大島は井戸はなく飲料水は雨が降るこそそれを天水桶に申しませうか、それに水が屋根から流れ込むのを取つて置いてそれを飲み水にするのださうです。大島の内でも今自分の居る元村なぞは淋しいところださうです。同島の内でも波浮(ハブ)村の港の方がなんさなく港街に云ふ明るい氣分がたゞようて居るどころださうです。そこへも行つて見たいのですが、旅費がだん／＼心細くなり、まるで島流しにでもなつたやうだし東京が戀しくなつたので汽船の都合で明日は歸京したいと思つて居ます。海があれば汽船が出なければもう二三日滞在しなければなりません。梅の花咲く頃はまだ／＼情趣がある事でせう。

右はあらましの大島見聞記であります

先生も或は大島へ來られたかも知れませんが、毎日々々宿に居てする事もなく退屈なのでこんなつまらない事を書いてしまひました。

句も作らうと思つて居るのですが、さ考へて見るご作れません。まだ修業が足りないののでせう。駄句を三句作つて來月の川柳塔へ投句いたしますから御覽下さい。もし大島見物に來られるのでしたら柳川館にお泊りなさい。女將や女中番頭等の親切、それに居心地のよいのがなによりですから。らんびつお許し下さい。

十月二十一日夜

波の音を聞きながら

駒 人

路郎先生へ
今汽船が着いたさ女將の聲に立上り急ぎ封筒に入れて宿引の番頭と共に港へ行く途中の小さな郵便局へ此手紙を入れに行きます。番頭が呼んで居ますからこゝで筆をこめます(午後九時四拾分記す)

寸するお前チツプがほしいのか

◇萬よし偶會 (二)

(十一月八日夜)

大阪に住んで揉手の癖がつき

立寄つたこゝは大阪砂埃り

ステツキなをこつ／＼突／＼繰らす

梅田驛一旗上げる氣で降りる

本願寺揉めてゐるさは嘘のやう

ステツキを我々地上に立てば風

ステツキを振り／＼橋のまへ来る

大阪へ来ては橋の數人の數

逃げて来た同志大大阪で遇ひ

受付の机汚れたまゝでよし

清水で矢つ張りでかい本願寺

ステツキを振つて悪友待つてゐる

先斗町叡山はもう雪になり

嵐山へ今日は書生の多い事

◇萬よし偶會 (二)

圓タク

呼んだなき思ふ圓タク首を出し

散會に近く圓タクよつてくる

圓タクで来て圓タクで去の用事

考へる間に圓タクの行てしまひ

圓タクで来て泊めてくれ／＼

◇一文字居鼎座吟

(一文字報)

久しうご無沙汰いたして居ります。小生ながら病氣の所漸く全快いたし更に柳壇の

末席を汚さうとしてゐます。全快も同時に大

野町へ轉居しました。御社特約店岳文堂の裏

手ですから 同人諸兄にも自然岳文堂へ御感

の節はお立寄下さいます様 宜敷お傳へ下さ

い。

今後時々小集會を催したいと思ひます

ので切に飯山兄及同人諸兄の後援にあづか

りたいと思つて居ります。

紅茶、邪覺、全快

紅茶すゝるモダンガールの笑ひ聲

共同栓お邪覺します水を受け

セコンドの刻みも嬉し病癒は

全快に友の情が身に沁みる

全快に朝日眩しいばかりなり

邪覺者にされて末の子寢てしまひ

今一手おしい所へ客が来る

全快の友は嬉し顔で来る

病床で苦しんだ事くり返し

出前箱邪覺になるので外へ出し

集金はお邪覺ですな如才なし

看護婦の戀全快を淋しがり

全快にまだ賣薬が残つてゐ

全快にちさかたまつた借が出来

全快をするさ働く心算なり

▲飯山氏を通じてのお便り拜見しました。御

全快をおよろこび申上ります。お書添のやう

に今後大いに奮つて下さい。小集をやられる

節は御通知下さい。同人の中誰れでも寄せて

貰ひます。そして本欄を精々賑やかして下さい。(松郎生)

◇刀根山小集 (十一月十三日)

(やなぎ會報)

炬燵

繪草紙に雪解を蹴く炬燵なり

足袋を刺す炬燵の仕事抄らす

もうつさ温もつてからでる炬燵

温もつたらしい炬燵の顔になり

妾宅の炬燵へ冬の陽があたり

爪弾の後ろに炬燵のくもつて

忠告へ炬燵うなづくばかりなり

炬燵から調子を上げて起き上り

外は雪母は炬燵で針仕事

炬燵出た猫背伸びして炬燵みる

留守番に炬燵危ないものにされ

頼杖のまゝ夢に入る置炬燵

桃太郎の語に炬燵もう寝入り

賃仕事炬燵の咳を氣にしてる

炬燵から祖母はうつゝに返事する

女房は炬燵に夜衣をかけて待ち

日向ぼこ母は炬燵を貼つてゐる

火が消はく炬燵邪けんに抛り出され

寄附張へお馴染甲斐を頼まれる

色戀の外に彼女が馴染んでる

末の子のもう二へん目へ馴染んで

敷島のサウへ馴染は手を伸し

くみさぐ横になつて馴染なり

はり中で常着でよい馴染客

馴染にも逢はす色街寒い晩

お馴染は床やで尻が長うなり

晴久

同

同

同

其象

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

古本屋 勝手に探す 馴染客 瀧二
 好い氣前めて馴染へ酌をさせ 同
 馴染客主人の趣味を聴いてゐる 桃 哉
 合圖して二階に上る 馴染客 同

◇冷笑居偶會 (十一月十二夜)

(鮎 美 報)

久しく臨床中の冷笑君を見舞ふべく案山子君と伴れ立つて冷笑居を訪れました。思つてたより快方に向はれてゐたのを欣びました。三人は打解けて語り乍ら、居主の動議で左記二題を作句しました。作句中ふふ眠聲兄の居られない事をさびしく思ひました。

女學生

その一人化粧もしてゐる女學生 冷 笑
 そのタイブ女學生さと思はれず 同
 女學生内へ歸れば孝女にて 同
 ハンカチの中に笑るゐる女學生 案山子
 女學校をまだくうちの子供です 同
 階級をハツキり見せる女學生 鮎 美
 共鳴の果て女學生詩を作る 同
 女學生笑へばばらにさも似たる 同
 呼び捨て 同
 呼び捨てに見はなにかさ用を云ひ 冷 笑
 呼び捨てたも。淋しい氣にもなり 同
 呼び捨てへただハイの妻にと 同
 呼び捨ても出来ず仕事もして呉れず 案山子
 頼杖は呼び捨てをじて茶をすゝり 同
 呼び捨ての二度目は眼まで變る也 同
 停電の中に呼び捨てを續くなり 同
 呼び捨ては飯がこけてるくゝある 同

呼び捨てになれて女房の地味にナリ 鮎 美
 ▲近作柳楳中に熱のある 新進作家都藤冷笑君が兼てより御病氣中と聞いて、案じながらくにお見舞ひもせずに失禮してゐました。が右お快方との報を得て嬉しく思ひました。一日も早く御全快の程を祈ります。常々深い親しみを持たれてゐるあなた等の方等、こうした友情のこもる報に接して一層嬉しい感じをもよほしました。同事にいつくまで兄等のグループに幸あれと祈りつゝ。(松郎生)

◇漫筆帳より

(万よし 報)

一金ちと考えたらしく書き 傘下堂
 三味弾かの藝者並べた通な人 乾 坤
 白足袋を穿いて女を知りつくし 屏 三 呂
 万よしを出て看板につき 當り 双 柳
 欠伸した時に犬は寝められて 春 次
 蹴あしをハツキり見せてくれる 山 家
 何處が宜いかさ座を見て廻り 放 馬
 左馬殺生な夜を廻り返し 秋 生
 身代りの様に舞子は首なのべ 殘 紅
 九月一日にビール味の味もよし 溪花坊
 万よしをひきく出る轢かれさう 水 府
 吞ますべく吞むべく生きたる男にて 路 郎
 ビールビール秋が来た秋が来た 同
 ▲新戒橋南詰に「萬よし」といふ小さいな上燭屋があります。道頓堀邊へ出掛けた序に手輕に飲むのに便利なのさ。亭主の勉強振りに中々賑はうてゐます。その主人公が即ち雅號もそのまゝ萬よしと云つて紙上や席

上でお馴染の熱心な川柳家であります。萬よし店には、漫筆帖といふのがあつて、お客の顔を見れば「何か御一筆な」と書かせられます。その漫筆帖には、多くの名士か、或は戯畫に醉筆にそれは、いろ／＼な健筆が振はれてゐます。右の句は、その中より最近の川柳を送られたのであります。漫筆帖(仙花紙二十枚綴)は最近二年程の間に、百數十冊に達してゐるさうです。道頓堀へ行かれた節は立寄つて鑑賞されたら面白いと思ひます。(一五、九、一五、松郎生)

川柳詩人

さしてのあなたをアルバムにお

のこし下さい。又御會合を記念するためにも是非弊館を御利用下さい。出張御希望の方はお電話さへいたゞけば直ぐさま伺ひます。地方の方々も御出京の節は必ずお立寄り願ひます。東都におけるお姿は唯一のお土産になります。

アリタ 寫眞館

有 田 奏
 東京芝區明舟町二〇
 電話 青山 七一三〇

編輯後記

▲私は十一月の上旬に又々上京した。勿論公
用で出かけるので、今度は誰に逢つて、誰に
逢つてき胸算用をしてゐることも、全く外づ
れて思ふやうにお目に、かかれず、に又の機曾
を思ひながら、車上に揺られながら歸鳴する
例になつてゐる。其代り意外な方にお目に、か
れる喜びのあることもあつた。

▲川柳すめめ會へ、途中から顔出しをして同
會の人達や濱の山千代二君が、同人が中野に
こゝななどは、その喜びの一つであつた。

▲東京支部柳路の熱心な、駒人が中野に
轉じたの、新に檜山千代二君が、同人が中野に
たので一層の堅實さを示すことになつた。七
日には私のために句會を開いた。柳路は未だ
く、東京に、同人を殖やすと云つて力んでゐ
る。私は四日の夜柳路居に一泊して、朝窓を
ひらいて富士を見せられたことを、思ひなが
ら、その好意を謝してゐる。▲東京から戻つ
た私は机上の山積例によつて例の如く、手
のつてやうもない始末で、晝夜兼行で片附け
てゐたが、遂々やりきれず病臥するに至つた
それがために十二月で、總決算をする筈の私
の原稿も、すっかり手筈が狂つて、全部新年
號に載らねばならぬ破目に立ち至つた。讀者
諸君に對して誠に申解がないと思つてゐる。
一週間の旅が私を過勞に追ひやつたことは、
重加さざるからである。私はそんなに弱い身
體だとは思つてゐないが、いろんな方面に於
ける私を知つてゐる人は、うなずき得ること
なのである。又美の作が心配して叱りに来る

かも知れない。▲十七日の夕に名古屋の森田
一二氏が來社した。英豆も自分も三人で夜の
十一時まで語り合つた。▲同人の高見柳骨は
今九州の陸軍特別大演習に参加して、痛快が
つてゐる。近く除隊になるので、同人諸兄も
再び相見のよろびを思ふて活躍してゐるさ
うである。▲南紀田邊町の堀根林君の令息啓
次郎君が、洋品店を開店したことを、報じて來
た。よく賣れるやうに祈つてゐる。▲同人庄高
たよしの野球熱、ますます旺盛、最近北畠の大
阪高等學校の校庭で、梅田タマヤグラアマ對
戦し十對三で惨敗せしめ、鼻息なかく、に荒
しこのこと。▲牛窓屏三呂君は健康を害して
ゐる。聞く同病相憐れむ譯ではないが、特に
快復の早からんことを祈つてゐる。
▲休刊中の關西川柳は、一月一日から隔月發
行で復活するさうである。
▲道廣御泉君は日本川柳新聞を、刊行するさ
うである。發展をのぞむ。
▲小川芳翠氏が十一月十三日永眠されまし
た。お悼み申します。
▲西原柳雨翁、姪子省子氏木村牛文、錢氏安井
ひろし氏喜多一二氏の原稿などの、總決算を
やりたしと思つてゐたが、さうく、それも出
來なかつた御諒察を乞ふ。(病路郎生)

轉居と句の正誤

▲酒井駒人君は東京市外中野町小瀧橋際
一四九八大和米菓株式會社方へ轉居▲池澤樂
居氏は大坂府泉北郡高石町北六二六へ轉居
▲河添一文字君は大阪府此花區大野町九〇
へ移轉▲端天祐子君は京城市本町二丁目百
十番地に移る▲十月號の小鐵千鳥君の(入隊
の晩寢臺に寝つ十一月號の文字重復せ
るはあやまり十一月號の十五頁、世なの
れた(い)の句は、金宅志郎君の句にあらすとの
通知があつた。

川柳雜誌社同人

主幹 麻生路郎

岩崎路 伊藤彦造 井上刀馬 原史風 橋本馬子 西垣松雨 德田柳郎 太田徹底 河田放馬 龜井花童 横田眠聲 高橋かほ 高見柳骨

竹内多郎 塚崎松豆 黒木大 柳川助六 松本之助 藤本卯之 駒生美乃 佐々木獸 酒井飯郎 喜田山人 三好萬一 庄山千代二 (いろは順)

道頓堀支部 萬よし 神戶支部 萬よし
天満支部 史風 山口支部 洲馬
濱寺支部 朝陽 豐中支部 馬行
築港支部 飯山 東京支部 柳路
城南支部 美の作 函館支部 花童子
西宮支部 葵豆 住吉支部 双柳
淀川支部 松雨 仁川支部 右大臣

社主藤堂氏の

ための悪文！

變人の古本屋である。時々お客さんに氣焔をあげて、あとであんなことを云はればモット本が賣れたらうにさ後悔をするところなど仲々うれしいおちさんである。なんでも社會に貢獻するために本屋をはじめたのださいふてゐるがさうかも知れない。大いに讀んで（大いに買つて）このおちさんを満足させて下さい。

|| 路 郎 生 ||

正に耽讀の好季節

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

投稿規定

- ▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記するところ。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」ミ封筒に朱記するところ。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼各地會報は清記のこころ。
- ▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこころ。

募集

第四卷第二號課題

十二月十日締切

- ▼産後 森 東 魚 選
- ▼寫眞 林 田 馬 行 選
- ▼髮結 岩崎 柳路 共選
- 喜田 飯山

第四卷第三號課題

一月十日締切

- ▼支配人 村田 闕 坊 選
- ▼火鉢 駒井 美の 作 選
- ▼下宿 太田 朝陽 共選
- 井上 刀三

每號募集

- ▼近作柳櫻(三十句以内) 麻生路郎選
- ▼各地柳實(會報) 塚崎松郎編
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價定

- 一部 參拾錢
 - 六部 壹圓六拾錢
 - 十二部 參圓
- (共稅郵)

料告廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

大正十五年十一月廿五日印刷

大正十五年十二月一日發行

第三卷第十二號
(毎月一回一日發行)

- 編輯兼發行印刷人 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地 麻生 幸 二 郎
- 發行所 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地 川柳雜誌社
- 振替口座三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

店書棚賣

- (大阪) 明文堂 公立社 柳屋 岳文堂 和正堂
- (東京) 玉森堂 (神戸) 米田 後藤 (金澤)
- 石井 (函館) 石塚 (廣島) 金星堂

ドーコレ

新譜



印貝外内

月貳拾

長唄		浪花		花節		映畫劇	
岸の柳（枚續）		山科妻子別れ（二枚續）		小栗判官車曳（二枚續）		柳生旅日記の巻二枚續	
上調子		吉田一若		岡本鶴丸		早川燕平	
松島庄三郎 許屋勝七郎 杵屋新太郎		浪花家小虎丸		泉外オーケストラ 泉外オーケストラ 泉外オーケストラ		早川燕平	
義太夫		落語		喜歌劇		滑稽諷刺	
胡顔日記（二枚續）		女の穴探し（二枚續）		地獄へ落ちた頼助		混線	
竹本住廣		糸、豊澤綱之助		杉寛一行		内外演藝團	
笑福亭枝鶴		杉寛一行		井上起久子		常盤靜子	
内外兒童演藝團		杉寛一行		内外兒童演藝團		内外兒童演藝團	

刀三曰く		俚		謡		流行唄	
たさひそれがゲーテであらう、漱石であらうさ、乃至は二百圓もするオーバにでも一度はけちを付けて見なければ我慢の出来ない私です、貝印内外レコードに對しては残念乍らけちの付け様がありません……………なごさ自滿自賛を敢てして置きます		青島節、滿洲節		安來節、小原節		新博多節、舊博多節	
山村豊子		出雲福奴		三遊亭圓若		越中山清席、二郎	
童謡		管絃樂		和洋合奏		芝居囃子「中編」	
お人形さんの夢子守唄 乙鳥の姉さん 簾の下道		日本幻術曲ジューマ		芝居囃子「上編」		芝居囃子「中編」	
桂惠子		U・I 管絃樂團		C・S 管絃樂團		U・M 合奏團	
鈴木白洋		鈴木白洋		鈴木白洋		鈴木白洋	
常盤靜子		常盤靜子		常盤靜子		常盤靜子	
ヒアノ伴奏鳥取春湯		ヒアノ伴奏鳥取春湯		ヒアノ伴奏鳥取春湯		ヒアノ伴奏鳥取春湯	

立花家 喬之助		柳家 雪江		八尾中明光樓、千代野		越中山清席、二郎		三遊亭圓若		出雲福奴		山村豊子		青島節、滿洲節		安來節、小原節		新博多節、舊博多節		小原節		安來節、鴨綠江節		小原節		坂は照る（ささ） （發行大津路）																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
新小唄		書生節		合奏		和洋合奏		管絃樂		童謡		乙鳥の姉さん 簾の下道		日本幻術曲ジューマ		芝居囃子「上編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編」		芝居囃子「中編	

刀三曰く
たさひそれがゲートであらう。漱石であらう。一度はけちを付けて見なければ我慢の出来ない私です。が、且内外レコードに對しては残念乍らけちの付け様がありません。……なごさ自滿自賚を敢てして置きます

會商器音蓄外内

津今線沿神阪

會社合資